
使物語

ミドリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

使物語

【Zコード】

Z3854BA

【作者名】

ハーデリ

【あらすじ】

千石撫子の為の物語。撫子の曆お兄ちゃん陥落大作戦。

『偽物語』の千石宅訪問を踏まえて執筆しています。

『化物語・偽物語』の一次創作です。

時間軸としては『偽物語』後の話なので、ネタバレなどが気になる方はご注意下さい。

拙い文章ですが、少しでもお楽しみ頂ければ嬉しく思います。

この作品は『Arcadia』にも掲載しております。
また『Arcadia』で掲載したものに加筆・修正を行っています。

なでしこンジエル、その1

（001）

千石撫子。

そもそもは下の妹、月火が小学生だった頃の同級生で、数多きいた友達の一人。時折、阿良々木家に遊びに来ることがあり、僕と月火（火憐含む）が同室ということもあって、遊びに付き合わされて顔見知り程度の仲になつたのだが、所詮、顔見知りなのであつて友達と呼ぶには疑問が生じる、そんな不確かな関係だった。

月火との関係も中学が別々になつたことにより、途切れてしまい、必然的に僕との接点もなくなつた。

ところが、蛇に纏わる一件が切つ掛けとなり、僕と千石は数年ぶりに再会するに至る。

蛇が結んだ縁というとアレだけど、それが合縁奇縁となつて、僕と千石は長い期間を経て再度交流することになつたのだ。

今では、僕の数少ない友人の一人。僕のことを『お兄ちゃん』として慕つてくれている、可憐で内気な女の子である。今更説明するまでもないが、『お兄ちゃん』と言っても、あの傍迷惑で破天荒な肉親の愚妹達とは違う、僕にとって大切な『妹的存在』だ。

そんな、目に入れても痛くないほど可愛い存在である千石と、この度、二人でお出かけすることになった。

行き先は遊園地。無論デートなんて事はなく、僕の役回りは付き添いの保護者みたいなものだけど。

なぜ一人で遊園地に行くのかと、当然の疑問が出てくると思つので、簡潔に説明させて貰う事にする。

事の起こりは、僕がある重大な任務を千石に依頼したのが発端となる。任務の内容は、あるキーワードとなる台詞を、標的となる人物の口から引き出すという、諜報活動めいたモノだ。その成功報酬として千石が要望したのが、『遊園地に行きたい』というものだつた。

しかし相手は、幾多の挑戦者たちが無残に散つていった難攻不落の要塞で、千石も善戦はしたもの、残念ながらその任務を果たす事ができなかつた。

本来なら、任務失敗という事で千石の報酬は無しになるはずだったのだが、結局は千石の奮闘を労い、健闘賞という形で遊園地に連れて行つてやる事になつたのだ。

情報保護の観点から、少々抽象的な説明になつてしまつたのは大変申し訳ないが、経緯は大体こんな感じである。

でもまあ、千石も遊園地に行きたいだなんて、変に大人びていなと言つうか、年相応の子供らしさがあつてほんと心が温まるよな。本当は僕なんかどじやなく、同年代の友人と一緒に行けたほうが楽しいのだろうけど、そこは我慢して貰うしかない。

そう思うのなら、月火も一緒に連れていけば済む話なのかもしないが、今日は千石へのご褒美ということもあり、お金の負担は全て僕が賄うつもりなので、それだけで手一杯なのだ。

まあ、幾ら財布に余裕があつたとしても、あいつに奢つてやるつ

もりなんか毛頭ないけど。妹の扱いに関してはシビアな僕だ。

けれども、バイトもしていない親からのお小遣いのみで生活している僕としては、少々手痛い出費であったのは間違いない。

遊園地の入場料（園内フリー・バス）の値段を事前に自宅のパソコンで調べておいたのだが、手持ちの財布の中身では足りなかつたぐらいだ。

その為、親に頼んで僕個人の貯金（財源は全てお年玉だ）から差し引く形で、軍資金は確保してある。

通帳、キャッシュカードは親が保管しているので、自分では引き出せなかつたりする。

不便ではあるが、自分で管理していると、恐らくきっと……いや絶対、『肉体美を追求した芸術の参考書』の経費に消えていた筈だ。

そんなこんなで、手荷物のチェックをしていると携帯電話から着信音が鳴り響く。

画面を確認すると千石からだ。彼女は今時珍しく携帯電話を所有していないので、これは自宅からの電話になる。

手早く通話ボタンを押し、電話を耳にあてる。

『もしもし、暦お兄ちゃん?』

「よひ。千石」

千石の囁くような小さな声に気恥ずか返事を返す。

『あ、おはよひ、暦お兄ちゃん。今日ぜひ遊びに来てお願いします』

僕の声に安心したのか、幾分、声に張りがでたようだ。やっぱり千石は礼儀正しくていいよな。

「おへ、おはよ。もう準備できたか？」

『うふ。ぱしちりだよ』

主語のない会話だったが、僕達一人にはこれで十分に意味が通じていた。と言うのも、予め僕に電話をかけてくるように頼んでいたからなのだけれど。

僕と千石の家は、同地区の近所なので、下手に駅前などで待ち合わせするよりも、そのまま自宅前で合流したほうが勝手がいい。だから千石の準備が出来次第、僕に連絡するように頼んでおいたのだ。

それならば、変にお互い待つこともないし、僕が自転車で千石の家に向かえば、そのまま一人で自転車に乗って駅まで行くことができる。

自転車を持つていらない千石への配慮でもあったし、無理に待ち合わせをして、徒步で駅まで向かわせるのもどうかと思ったからだ。

あと何よりも、千石は待ち合わせといつもをやせんと理解していない節があるので、その対処もある。

かなり前の話になるが、僕が学校から出でてくるのを四時間近く待ち続けた前科がある、気が長い女の子なのだ。

考え過ぎかもしれないが、平気で夜明け前から待ちかねない。後悔先に立たずとも言つて、同じ轍を踏まさない為にも取れる策はとつてあいた方がいい。

「そうか、じゃあ今から向かうよ」

『うん。わかった』

準備完了の合図を伝えるだけの、会話目的の電話じゃないので、手早く要件を済ませ電話を切る。

服装はいつもと代わり映えしない、半袖のパーカーにジーンズ姿。ま、動き易い服装なのだから、問題ないだろう。既に準備をしてあつた鞄を引っつかみ、リビングに居る月火に悟られないように玄関に向かう。

細心の注意を払つて、音を立てずに扉を開け、無事脱出成功。月火の声が聞こえた気がするが、きっと氣のせいだ。

因みに火憐は不在だ。今朝方、僕がまだ布団の中で気分よく眠つている最中、鳩尾を踏みつけ、蹴り（“叩き”と同義）起こした上で、

「……兄ちゃん。あたし負けないから。絶対帰つてくるから……約束する。大丈夫。心配すんなって」

と、一方的にそんな不穏な台詞（十一分に死亡フラグに該当する筈だが、アイツにそんなフラグが適応される訳がない）を残して、颯爽と駆けていつたのは薄つすらと覚えている。兄を足蹴にしやがつた恨みは鮮明にだ。

だけど心配した覚えなどない。

余計な厄介事だけには巻き込まれないで欲しい。言つまでもないが、これは優しさではなく、僕に面倒が降りかかるのを懸念しての願いだ。

そんな訳で、手早く自転車を引っ張り出し、逃げるよつて千石の家に向かつたのだった。

仄かに温かい早朝の日差しを感じながら、悠々と自転車を走らせる。徒步でも十分圏内の距離。自転車だと、ほんの数分足らずの時間で到着するので、焦る必要もなかつた。

ここから周辺はよくハ九寺と遭遇するラッキーポイントなのだが、残念ながら今日は見当たらない。と言つてはいる間に、最後の曲がり角に差しかかる。もう千石の家は目と鼻の先だ。

角を曲がると、千石の家の外観と一緒に軒先で僕を待つ千石の姿も見えた。

紫外線対策か、はたまた視線避けのためか、黒い水玉リボンがついたカンカン帽（かたく編まれた、小さなつばの麦わら帽子の事だ）を被つているのが印象的だつた。以前に被つていたキャスケットの帽子よりも断然トレンドイーだ。

最後の直線でそんな事を考えながら自転車を漕いでいると、千石も僕に気付いたようで、顔を綻ばせてくれる。

「あよ、あよあよ今日は、よ、よよよよしへ、お、おお願いします」

僕が停止するなり、千石は奇怪な台詞と共に勢いよく腰を曲げる。その拍子にぽとつと帽子が落とした。

近所に住む年下の女の子に、帽子が落ちるほど角度で頭を下げ

られてしまつた。

わの電話では、もつと落ち着きのある対応がとれていた筈なのに……難儀な奴だな。なんで「トイシ」こんな緊張しているんだ？いや、そんな事より、今の構図は大変よろしくない。

自転車のスタンドを立て、帽子を拾い上げ、軽く手で汚れを払つてから渡してやる。

「「」、「ごめんなさい」。曆お兄ちゃん」

「……なんでそんな悪まつてんだよ」

「「」、「めんなさい」

「……謝れたら余計に困るんだけビレ」

「「」、「うん。今日は曆お兄ちゃんに撫子の我が仮を聞いて貰うんだから、失礼のないようこいつて思つてたら、緊張しちやつて……」

「いや、千石。そもそも先に我が仮を言つたのは僕なんだし、これは千石が頑張つてくれた事に対する「」褒美なんだからさ。気にする必要なんてないんだぞ」

「うん。ありがとうございます、曆お兄ちゃん。改めまして今日は宜しくお願ひします」

今度は、軽くペニリと頭を下げる千石だった。堅苦しいような気もするが、それで千石の気が楽になるのなら、それでいいのだろう。素直にお礼が言えるといつのは、それだけで美点だし、お礼を言われて嬉しくないはずがない。

千石の慎ましやかな物腰を少しでもいいから、妹達に見習つて貰いたいものだ。千石が本当の妹なら猫可愛がりしてしまつだらうな。

「おへ、お願いされた。今日は一緒に楽しもつな」

「うん。暦お兄ちゃん」

花が咲いたように微笑んで頷く千石は、一段と可愛らしく見えた。

その要因は、千石の今日の服装にあるのかもしれない。自分の服装に関しては無頓着な僕だが、人様の着る私服姿には興味津々なのだ。

依然、羽川の私服姿は見るには至っていないけど。

それはさて置き、今日の千石の服装を紹介しよう。

上半身は、薄く淡い緑色の総レースの半袖で、胸元にはアクセントとなる小さなリボンが施されている。網目から中に着込んだ服が薄つすらと透けて見える装いで、風通しもよさそうだ。

その中に着込んでいるのが、Aラインの真っ白な小花柄のキャミワンピース。少々スカート部分の丈が短いようで、陶器のような滑らかで真っ白い素足が露になっていた。

足元は涼しげなサンダルを履いており、その為、生足が際立つている。

全体的に肌の露出が多い大胆なコーディネートだ。

またも危うく、僕の為に恥ずかしいのを我慢して、できうる限りのお洒落な格好をしてくれたのかと見当違いの思い込みをしてしまう所だった。

いやはや無防備と言うか何と言うか……まあ、本人はただ単に、暑さ対策で薄着にしただけなんだろうけど。

それに露出の多さは、健康的な出立ちと言い換えることもできる。しかし妙に胸元が開けていたり、生地自体が薄いので日のやり場

に困ることに変わりはない。

あと装飾品として、首からはネックレスが下げられており、胸の辺りにある宝石がキラキラと煌めいていた。しなやかなデザインで派手すぎず、胸元を華やかに彩っている。

それと、腰にはいつも通り、千石お気に入りのウエストポーチが装着されていた。

う～む……ポーチは年相応の可愛らしさがあるのに比べて、ネックレスに関しては、大変申し訳ないが千石には少し早い気がする。別に似合っていないと言うわけではないのだが、小学生が口紅を塗っているような……少々不釣合いな感じが否めない。

それじゃ、千石のお母さんの持ち物だと言われた方がしっくりくる程の高価そうなものだからだ。

あの宝石ってダイヤじゃないのか？

僕に真贋を見抜ける程の審美眼はないのだが、とても模造品には見えない。

まあ、千石の服装、身なりに関するところなどこれがだ。

それとは別に、田に見えて気になると言つた、触れなければならない所が一ヶ所あるので、順を追つて言及してみよう。

まず、一つ目。

「千石。お前が髪を括つているといつか、編んでるの、初めて見たよ。珍しいな」

麦わら帽子に目がいって最初は見落としていたが、今日の千石の髪型は三つ編みだった。

艶のある黒髪が半分に分けられ、丁寧に編み込まれている。丁度イメチェン前の羽川（今はショートカットだけど）みたいな感じ。

「そ、そつ……羽川さんに教えてもらつたんだけど、べ、別に今日のためにとつておいた髪型じゃなによ」

「ふーん。そうか」

なるほど。羽川直伝の三つ編みだったのか。だとすれば羽川の髪型を思い浮かべたのは偶然ではなく必然だつたわけだ。

千石が何に対しても弁明しているのかは解らないが、そりや、髪型ぐらいうつによつて変えるだらつじ、今日たまたま三つ編みにしたい気分だつたのだろう。

女の子なんだし、髪型をアレンジするのはいいことだ。女子がヘアスタイルを変えるのは好きだし大歓迎である。

「ど、どうかな？」

僕を窺うように下から田線で見上げてくる。

ちよつぴり不安そうな表情を見ていると、うでもないのに嗜虐心が刺激され、思わず苛めたくなつてしまつ。か弱く纖細な千石を苛めるなんて有り得ないけど。

「うん。似合つてる。千石の大人しそうな雰囲気に良くあつてるし、可愛いな」

「わ……はわ、はわわわ」

頬に手をあて、狼狽える千石だつた。恥ずかしがり屋さんだし、

面と向かって褒められる事に免疫がないのだろう。

そして氣になる点、二つ目。

「なあ、千石。そのバスケットは何なんだ？」

「言つまでもないが、バスケットと言つても、籠^{ラタン}で出来たピクニッ
クバスケットである。

片手で持ち運べる程度の大きさで、蓋の淵には赤と白で出来たチ
エックの布が巻かれており趣味のよい一品だ。
一応片手で持てるサイズだが、千石が両手でしっかりと持つてい
たのがずっと氣になっていた。

「えっと、お弁当。今日の昼食が入ってるんだよ。曆お兄ちゃんの
分もあるから心配しないでね」

「マジか。それは却つて氣を使わせちゃつたみたいで悪いな

「匂^ヒい飯なんかも、遊園地にあるレストランで奢つてやるつもりだ
ったのに。こんな所にまで氣が回るなんて流石千石だ。

「ううん。そんなことないよ。やんなの氣こしないで

それに向とも奥床しい。ほんと、うちの妹達に爪の垢を煎じて飲
ませたい。

「でも、今日は曆お兄ちゃんとドーテができるなんて、撫子、嬉しい

な

「そうなのか。ま、そうだな

」の物言いでは、僕と一緒に出かける事 자체が嬉しいという風に受け取れてしまうが、千石が本当に言いたいのは、遊園地に行けるのが嬉しい」と言うことなので、そこを取違えてはいけない。

千石は「こういう不用意な発言で、同級生の男の子達を魅惑していたのかもしれないな。天然とは恐ろしいものだ。

あと一緒に出かけるだけで、デートなんて言葉を用いるのはどうかと思ったが、これぐらいの年の女の子からしたら、おませに背伸びした表現を使いたいものなんだらう。

「僕もこれで年甲斐もなく遊園地が楽しみで、遠足前の小学生みたいに、なかなか寝付けなかつたんだぜ」

「ふふ、そつなんだ」

「千石も田の下、ちょっとクマが出来てるぜ。さてはお前も眠れなかつたのか?」

「え? うん。今日着ていく服を選ぶのを夜通し悩んでたわけじゃなくて、撫子も、楽しみで眠れなかつただけだよ」

なぜそんな一例を出したのか解らないが、まあ、結局は僕と一緒にだつてことなんだよな。

「一応、親御さんに挨拶した方がいいか?」

「え? 曆お兄ちゃん、それって『娘さんを僕に下さ』ってことかな?」

「違うよ!! お前はテレビドラマの見すぎだ!! 何でこの流れで、いきなりそんな一大イベントが発生すんだよ!! 大切な娘さんを預かるんだから、保護者的立場としての責任もあるし、挨拶したい方がいいかと思つただけだ!!」

びっくりする発言をする奴だな。思わず内気な千石に対し本気でツッコミを入れてしまつたじやないか。

あれ……ちょっとときづく言い過ぎたかもしれない。千石がしょんぼりして、うな垂れてしまつた。ってあれはボケではなかつたのか？ 驄目だ。千石の要求している答えが見つからない。

ああ、そうか！ あれはノリツッコミを希望していたのか。だが『進んだ時計の針を戻すことはできない』のだ。今日これらの一連の行いで挽回していくしかない。

「…………保護者」

千石は、ポツリとそんな小さな呟きを漏らす。なぜか不本意そうな顔でちょっと怖い。

「…………でも、同級生の女の子と遊びに行くって事にしてあるから……それはちょっと、困るかも」

言葉を続けた千石は、更にその表情を曇らせていた。

「そりなのかな？ 別に後ろめたい事じゃないし、正直に言つたらいいのに」

でも確かに千石が、僕たちの関係を親に説明するのは難しいかもしない。

なんで『同級生だった友達の兄』と遊びに行くんだって話だ。未だ千石の両親とは、電話での接触もないわけだし、突然見ず知らずの男が、「一緒に遊園地に行つてきます」なんて言つても、安

心させる所か、余計に心配をさせてしまつ結果になるか……。

僕と千石は至つて健全な関係なのだが、妙な勘ぐりをされても面白くないし。

う～む、そこまでは頭が回っていなかつたな。

「ん～。まあ、それなら仕方ないか」

「でもちゃんと、今日は遅くなるつて言つてあるから大丈夫だよ」

「そうか。なら心配ないな」

ま、なるべく早く帰るつもりだし、責任もつて家まで送り届けるのだから問題ない。

「うん。もしかしたら今日は帰らないとも言つてある」

「待て！ 帰るよ。ちゃんと今日中に帰つてくれるよー。」

千石は不測の事態に備えて、念には念を入れただけなのだろうけど。それは心配し過ぎである。

だけど蛇の一件では、塾で一夜を明かす事になつたのだから、可能性が皆無といつわけではないのか……いやいや、あんな事態がそうとう起つこつて堪るか。

と、何時までもこゝにして立ち話をしていくてもしちょうがない。やつと駅に向かわなければ。

「よし、千石。出発するぞ」
「うん」

千石からバスケットを受け取り、自転車の前カゴに入れてしまつ。それから僕がサドルに跨り、ふらつかないように地面を踏みしめ、

千石が後部座席に腰を下ろすのを確認してから、自転車を漕ぎ始めた。

「千石って自転車乗るのは初めてだよな。なるべく揺りきなによつに気をつけるけど、しつかり掴まつてんんだぞ」

「そうだね……うん。そうする」

そう言って、力いつぱい僕の腰に手を回す千石だった。
従順な千石は、僕の言葉の通り『しつかりと掴む』こととしたようだ。

千石の控えめな胸が押し付けられているのはその為である。

なぜか、脇をしめて、無理やり胸を強調するような不自然な格好になつてゐるのも、「怖いよ」と言いながら、身体をこれでもかと密着させてくるのも、自転車に慣れていない、恐怖心からくる畏縮みたいなものなのだろう。

これが千石相手でなければ、ともすれば、色仕掛けされているんじゃないかと勘違いしかねない状況だな。

うん。僕が健全な判断力を持つた、実直で紳士な『お兄ちゃん』でなければ危なかつた。

そこからは、千石が喋れる状態でもなかつたので、特に会話らしい会話もなく駅に向かつていた。

忍に血を分け与えたのが、丁度昨日だつた事もあり、身体能力が底上げされていて、いつも以上に足取りは軽い。

千石の華奢な体格は見た目通りの軽さで、重さを感じじることはなかつた。

しかしながら千石の僕に抱きつく力は尋常ではない。

この子の何処にそんな力が隠されているのか、全く、不思議なものだ。よほど自転車に乗っているのが怖いのだ。

そうこいつしている内に、駅近くの繁華街に差し掛かる。

そこで自然と目に入ったショーウィンドウには、自転車から落ちないよう必死に僕にしがみ付いている千石の姿が映っていた。

なんとも微笑ましい光景だ。

……光景なのだが、でも、なぜだろう……。

それが、被食者となる獲物を捕まえて押さえ込み、ヒゲを巻いて絡みつき締め付ける捕食者　　あたかも、腹を空かした蛇が、食事をする為の下準備に精を出している姿に見えてしまったのは、一体全体どうこいつとなのだろう。

なでしこンジエル、その2

(003)

遊園地の名前は『エンジエルランド』。アミューズメント型のテーマパークである。

2年前に大幅全面改装を行い、リニューアルオープンに伴つて『エンジエルランド』に改称したらしいのだが、元々の名前は『ランドセルランド』と言つたそうだ。

その頃 まだランドセルランドと呼ばれていた頃は、その前衛的かつユニークで可愛らしい名前からは想像もつかない、過激なアトラクションで埋め尽くされていたらしい。

一言で言ひ表せば、 “ 阿鼻叫喚 ” 。

情報雑誌などには、『天国に一番近い遊園地』と紹介・揶揄されていた程だ。

この場合の『天国』とは、あの世……地獄と言い換えても差し支えない。別に事故が起こつて死人が出たという訳ではなく、それ程度にスリリングな体験が約束されていると言つことなのだけれど。

恋人同士で行くと、その半数は別れる結果になると言う都市伝説まで存在する。その為、カップルで訪れる者は殆どいなかつたようだ。

そんな型破りな遊園地ではあるが、どう罷り間違つたのかそれなりの盛況を博し、順調に時代の波に乗つていたらしい。

だが、不況の影響で徐々に業績が悪化し、このままでは閉園も免れないという状況になり、起死回生をかけ一念発起し、リニューアルに踏み切ったそうだ。

エンジエルランドといつ名前は、『天国に一番近い遊園地』から連想なのだろう。

今では、恋人や家族連れ、県外からの学生団体、老若男女、誰でも楽しめる万人受けする遊園地へと変貌するに至ったことだ。

電車に揺られる事一時間半と少し。3回の乗り換えとバスの経由を経て、目的地である遊園地、エンジエルランドに到着した。今は丁度10時なつたぐらい。開園は9時なので、既に入場口は人で賑わっていた。

まずはチケット売り場に向かい、二人分の入場料を支払う。入場チケット自体がそのまま園内バスポートになつてるので、中のアトラクションは全て乗り放題だ。

となれば、乗れば乗るほど元手が取れる　なんて、せせこましい考えはなしにして、千石のペースにあわせて、ゆっくり楽しめばいいだろう。

勿論、今日は千石へのご褒美で来ているのだから、彼女にお金を出させるなんて真似はしない。

「……暦お兄ちゃん、本当にいいの？」

予想はしていたが、僕が全額負担するのを気に病んでくれ、千石

の全身から申し訳ないオーラが漂っていた。

「当たり前だろ。今日はお前への『褒美』で来てるんだから、これぐらーコセてくれ」

「…………うん。暦お兄ちゃん」

「む。今日は楽しもうぜ、千石」

「暦お兄ちゃん。本当にありがと」

律儀に頭を下げてお礼してくれた千石だった。折角の遊園地なのだから、気兼ねなく、心の底から楽しんで貰えたらなと思う。

ともかくにも、逸る気持ちを抑え入場ゲートに向かう。これでいて僕も、遊園地に来て浮かれているのかもしない。

入園する際にチケットと引き換えて、園内の地図や概要が書かれたパンフレットを受け取った。

園内には、もう人の姿が結構あり、楽しそうな笑顔で溢れかえっている。家族連れや友達同士、カップルの姿など客層は満遍なくといった感じ。

あとよく目に付くのが、この遊園地のトレンドなのか、天使の輪を頭に乗ついている人がちらほらといた。黄色い輪つかが宙吊りになつて浮いている。

要はネズミの国でも見かけられる、ネズミ耳のカチューシャみたいなものだ。

一番近い表現は『灰羽連盟』の光輪を固定する器具のような感じなのだが、多分伝わらないだろうな。

何にしても、僕が装着するのは、少し恥ずかしいかもしない。

また、旧遊園地のキャッチフレーズ　『天国に一番近い遊園地』は今現在でも有効のようで、園内のアトラクションの高度にはかなりこだわりがあるようだ。

ジェットコースター や フリー フォール、観覧車などは世界有数の高さを誇るらしい。中でも、観覧車の大きさは、離れたこの場所から見ても圧倒されるものがある。その偉観は圧巻だった。

「ふうん。なかなか施設も充実してるんだな。結構いろんなアトラクションがあるよつだし……千石は何に乗りたいんだ？」

僕は、手元のパンフレットを見据えつつ、千石に問いかける。

「うーん……何がいいかな」

僕がパンフレットを開いて確認していると、横合いから千石が覗き込んでくる。

千石にも同様のパンフレットが配られたはずなのだが……まあこっちの方が指差し確認なんかも出来て一緒に相談しやすいし、都合がいいか。

二人で顔を寄せ合っている姿は、周りから見ればきっと仲のいい兄妹みたい見えるんだろうな。

そうして、しばらく悩んだ末に千石が出した答は意外なものだった。

「やつぱり……ジーットコースターがいいかな」

「千石……大丈夫なのか？……此処のは特に怖いらしいぞ」

「うん。 大丈夫」

「へえ、そつか……」

本心として、僕が大丈夫じゃない。嫌いとは言わないまでも、あまり好んで乗りたくないのが正直な所である。

「寧ろ大好きだよ」

「…………そうなんだ」

思いの他と言つべきか、意外や意外、千石は絶叫マシーンなどの過激なアトラクションを苦手としている訳ではないようだ。あんなに自転車を怖がっていたのは何だつたんだろうか…………。

「うん。 これ乗つてみたかったの。これだけは外せない」

有無を言わせぬ、確固たる決意を感じさせる声。こんな意思の強い千石はなかなか見れたものではない。

そもそも遊園地に行きたいというのは千石たつての希望だったのだから、不思議でも何でもないか。

遊園地の大半はスリルを味わう乗り物で占めてるわけだし。

今日は千石に付き合つと決めた以上、ここで引き下がるわけにはいかないよな。

腹を括り、ジェットコースター乗り場に向かう僕達だった。

人は見かけによらないとは、よく言つたものだ。

好きと言つても、それなりに怖がりはするだろ?と思つていたのだが……千石の絶叫マシーンへの恐怖心は皆無だった。

僕が悲鳴に近い叫び声を上げているのに対し、千石は叫ぶと言つても歎声なのだ。ジェットコースターで両手を上げるぐらい朝飯前といった感じ。

まあ内気少女の照れ屋ちゃんである千石が、そんな事するわけないけど。

千石の要望通り、ジェットコースターに乗った後も、バイキング（大きな船の乗り物が、振り子のように大きく揺れるアレ、ここのは一回転した）、フリー フォール（真上に上昇して垂直急降下するやつ）と、過激なアトラクションが続いて、僕は疲弊気味。千石はけろっとしたものだ。

そして次に僕と千石が訪れたのは、『迷宮ダンジョン』。

迷宮といつても、ただの迷路なのだけど、僕的にはひと息つけそうで願つたり叶つたりだ。

待ち時間もそこそこ、係員の誘導のもと、『迷宮ダンジョン』のスタート地点に案内される。

「ハ、暦お兄ちゃん」

前の組が出発したら僕等もスタートと言う間際になつて、僕の袖をくいくいと引っ張りながら、千石が呼びかけてきた。

「どうしたんだ千石?」

「お……お願いがあるんだけど、い、いいかな?」

伏し目がちなのに加えて、千石の顔が麦わら帽子のひさしに遮られてよく見えないが、なんだか恥ずかしそうだ。ちらりと垣間見た顔の色は真っ赤だった氣もするし、声も少し上擦っている。

「千石のお願いなら何でも訊いてやるが。何でも言ってくれ」

しかしながら千石の方から僕にお願いなんて珍しい。千石の頼みなら無条件で叶えてやりたくなる。

「あ……あの…………て……てを…………」

「て?」

「……手を繋いで……欲しい……な……」

「ん? 手を? もう。何だ、そんなことか」

「いいの!?」

「何だよ、これぐらい構わないぜ」

千石は、もしかしたら暗所恐怖症なのかもしれないな。中は薄暗い迷路のようだし、もし逸れでもしたら大変だ。

千石は携帯電話も持っていないから合流するのにも一苦労しそうだし、最悪 園内放送で呼び出すなんて恥ずかしい真似をしないでいけないかもしない。

これは手を繋いでいた方が安全だし、得策だな。

「ほんとこいいの？」

「なんだよ、僕と千石の仲だろ」

「な、な撫子と『お兄ちゃん』との……仲……わ、わ、はわわわわわ」

急に千石が情緒不安定になってしまった。遊園地に来てテンションが上りきってしまったのだろうか？

千石の生態はまだ謎に満ちている。

「ほら、千石」

僕はそう言って、左手を差し出す。ちなみに右手には千石から預かったバスケットを持っている。

「じゃ、じゃあ……お手を拝借します」

なんかその表現では、また違った意味に聞こえてくるな。一本締めをしなくちゃいけないような気がしてくる。

ともあれ、千石が控えめな所作で僕の手の平に、ひんやりとした冷たい指先をそっと触れさせる。

僕の手はそこまで大きくないのだけど、千石の手の小ささと比べると、相対的に大きく感じられた。

なんだこのちっこい生物は！

ま、手を繋ぐことは彼女である戦場ヶ原は当然として、なぜかあの後輩……神原もあるし、今更恥ずかしがることでもない。

丁度、僕達の番となつたので、添えられているだけだった手を、僕がしっかりと握つてやり、千石の手を引いて、ダンジョン（アトラクション的に）に突入したのだつた。

「これは、凄いな」

ダンジョンに足を踏み入れた僕の率直な感想だった。

辺りは薄暗く、等間隔に設置された松明の灯りだけが頼りとなつていて。とは言つても本物の松明ではなく、偽物だと判る光源人工灯なのだけど、それでもよく見なければ、本物と見まがう完成度だ。

松明で照らされている洞窟を模した通路も、かなり精密かつリアルに出来ている。

通路の広さは、僕が両手を広げたら両端に手をつけぐらいい。一人並んで歩くぐらいならば不自由しない広さが確保されている。

「なんだか、ドラクエの世界に迷い込んだじゅうたみたいだね」「だな」

千石の言つとおり内部の構造はRPGのダンジョンを彷彿とさせた。

作り物ではあるが、トカゲのような生物が岩壁を這い回り、頭上では蝙蝠が飛び交っている。

本当にダンジョンの中を歩いてくるのでまと、錯覚するほどの臨場感がある。

「やういえば千石ってドラクエ好きなんだよな

千石もこれで、王道RPGはしっかりと押さえている子なのだ。

中でもドラゴンクエストのナンバリングタイトル作品は、僕の知る限りではドラクエ6まではプレイ済みだつたはず。プレステは所有していないようなので7以降は未プレイだと思われる。

「うん。ドラクエは好きだよ。中でも4が一番好きかな。暦お兄ちゃんは？」

「僕はやっぱり、5だな。3も捨てがたいけど。モンスターが仲間になるなんて衝撃的だつたぜ」

「撫子も4の次は、5が好きかな」

「千石はなんかフローラってイメージだよな」

「え？ なんで？」

「いや、物静かで控えめな感じが千石と似てるだろ」

私見ではあるけれど、羽川がビアンカのイメージで、戦場ヶ原はDS版に登場したフローラの姉、デボラだ（DS版のドラクエ5はやつたことないけど）。神原は誰だろう？ 新機軸すぎてあいつにあうキャラが見つからない。八九寺はなんか可愛いマスコット的モンスター、スライム系統だろう。

「そうかな……ねえ暦お兄ちゃん。暦お兄ちゃんは結婚する時はどっちを選んだの？」

千石が僕に訊いているのは、ドラクエ5屈指の重大イベントビアンカとフローラ、この2人の美女の内から結婚相手を選ぶという究極の選択のことである。『天空の花嫁』とサブタイトルにも

なつて いる通り 避けては 通れ ない道 のだ。

この生涯の伴侶を決めるという局面に、決断を下せず苦悩した人も多いことだろう。

関係ないが、ルドマンさん（フローラの父親）を選択して、彼を困らせたプレイヤーも数多くいるはずだ。

でも僕の答は決まっていた。

「勿論ビアンカ一筋だぜ」

[REDACTED]

あれ？ 千石の反応がない。というか繋いでいる手の力が増した
ような気がする……ちょっと痛い。それに空気が重くなつた気も…
と、しばらく無反応だった千石だが、ようやく口を開いて反
応してくれた。

無視された訳ではないようで——安心だ。

「…………り、理由は…………なんで……かな？」

少し瓶に棘があるのに感じぬの?」「だれ?」

「そうだな……子供達の髪の色が金髪じゃないと、なんか、しつくりこなくてさ」

フローラを結婚相手に選ぶと、生まれてくる子供（双子の兄妹）の髪の色が、青色になつてしまふのだ。僕的にあの髪の色はない。フローラと結婚すれば、ルドマンさんから、お金や防具の融資を受けとれるメリットが発生するけど、そこだけは譲れなかつたのだ。

「千石はもしかして、フローラ派だったのか？」

なんか怒つてそうだったし、そう推測したのだけど……。

「ううん。撫子もビアンカ派だよ」

「あれ？」

では、何で空気が重くなつたのだろう？「ううん、よくわかんな
いや。

「千石にも明確な理由があつたりするのか？」

「うん、あるよ……」

千石は一拍の間を空けて、強調するように次の言葉を発した。

「だつて、一度は離れ離れになつちやつた一人が、長い年月を経て
から再会して、子供の頃からの想いが成就するなんて素敵だから」

なるほど。千石はビアンカの気持ちに同調しているのか。やっぱ
りこんな考えが出来る辺り、女の子だよね。

「まあ、確かに、幼少期のイベントがある分、ビアンカの方が有利
だよな。思い入れが強くなるし」

幼少時代、一緒に冒険をしたアドバンテージは大きいだろう。

「な……なんだか……撫子と、暦お兄ちゃんみたい……だね」

「ああ、そつか。僕と千石も、数年ぶりに再会したんだもんな」

だからどうしたと言つ話なのだが、なぜか満足そうな千石だった。

「にしても、結構寒いな」

外との気温差の所為もあるんだろうが、空調がガンガンに効いており異様に肌寒かった。

それに時折、誰かに鋭い視線で見据えられたかのように背筋がゾクゾクする。嫌な予感とは別物なのだけど、身の危険を感じる、不可思議な気分だ。

「うん、そうだね。でも、暦お兄ちゃんの手は温かいな。お口様みたい」

千石の手は確かに冷たいぐらいだし、もしかしたら、冷え性なんかかもしれない。

にしても、なかなか洒落た比喩表現をしてくれるな。

「きつと美味しいパンを作れるよ」

「おい千石。お前が、言葉を付け加えたことによって、綺麗な比喩表現から一転、微妙なラインのネタに変わっちまつたじゃねえか！」

僕の手は『太陽の手』、パンの発酵に適した温度の手じゃねえよ！」

僕から顔を逸らして俯く千石。どうやら、身体を震わせながらも笑うのを我慢しているらしい。千石撫子の笑い上戸は健在のようだ。

あと念の為に、『太陽の手』についての説明が必要だらうか……
今ひとつ知名度が判別つきにくいよな。

まあ軽く説明させて頂くと、パンを題材にした料理漫画にカテ「ライズされ、『ミスター味つ子』を彷彿とさせる食べた後の大げさでハイセンスなリアクションが売りの作品に登場する主人公がこの『太陽の手』の所有者なのである。

所有者と言つても、修行して身につけたとかではなく、元来の体质によるもので、この手で捏ねたパン生地は、発酵が進みやすくなるという利点が生まれる。その為、美味しいパンを作るのに好ましい手だと言えるのだ。

相変わらず、千石のネタのチョイスの傾向が読めない。咄嗟の応用力が試されるツッコミ役としては由々しき事態だ。

「ねえ暦お兄ちゃん」

僕が今後の方針について検討していると、千石が窺うよつた聲音で呼びかけてきた。

「ん？ どうした、千石？」
「暦お兄ちゃん、寒いのかなって思つて……」「いや、寒いといつても、これぐらいなら、何ともないよ」「そんな事ないよ、暦お兄ちゃんは寒いはずだよ！」
「……やっぱ、なのかな」

まあ、千石がそこまで断言するならそつなのだろう。僕は自分で思つてゐるよりも寒そうにしていたのかもしれないな。
千石にいらぬ心配をかけてしまつたよつだ。

「も、もし曁お兄ちやんが寒いんだったら、薄子が温めてあげよつか？」

「千石が？ それってどうことだ？」

寒いギャグを言つて、相手を凍りつかせる事はできるナビ、温めるとは一体？

心温まる談話でも聞かせてくれるのだりつか、などと考へていたら、

「うすれば、撫子も暖かくなつて一石一鳥だよ」

そう言つて、僕の腕に抱きついた。

ああ、なるほど。腕を組むことによつて、暖が取れるのか……千石もびづやひ寒かつたらしい。

至つて普通、奇を衒つたわけでもなく、なんとも合理的な方法だな。ペンギンなんか身を寄せ合つて寒波を堪え忍ぶと言つし。

僕だけなら我慢すれば済む話だけど、千石が寒いのなら、そつするのも致し方ない。

歩きたくはあるが、千石の好意を無下にする訳にもいかないしな。

「ま、この迷路をクリアして外に出れば、すぐに暑くなるんだろうからや、それまで、お願ひしようかな」

「この迷路のクリアに要する、所要時間は約20分とパンフレットに書いてあつた。

もう半分は進んだと思つし、あと10分もあればクリアできるだ

う。 そつ思つていたのだけど……。

あれから、30分……ダンジョンに踏み入つてから、実に40分は経過しようとしている。あらうことか僕達は、“まだ”迷つていた。

同じ所をぐるぐる行つたり来たりで、一向に進んだ気配はなく、さ迷い続けている。蒼い弾丸だ。

コンセプトが迷路なのだから、特におかしい訳ではない、寧ろ、本来あるべき姿なのではあるが……まあ、なんと云つか……正確に言つと、『僕は迷つていない』のだ。

奇しくも今の状況は、迷い牛に迷つてしまつた時と酷似していた。僕が八九寺に『迷い牛』ついていつたから迷つっていたように、今の僕は、千石についていくから迷つている。そんな感じだ。

理由というかその原因是　　僕が敢えて口を挟まず、千石の意思の赴くままに進んでいるから。今日の主役は千石なのだから、僕がしゃしゃり出る事ないと身を引いていたのだ。

言つてしまえば、子供でも挑戦出来るアトラクションなので、其処まで難解な迷路でもない。僕からすれば、ある程度歩き回つたところで、正解となるルートは導き出せていた。

しかし千石は…………器用に正解となる道だけを避け（神がかり的なルート選択だった）、ともすれば、わざと正解の道に入らないように、迷う事に専念しているようにも感じられるほどだ。

いやいやいやいや、そんな事をするメリットが見つからないし、地図を読むのは女性の方が苦手だつて言つしね。純粹に迷つているだけなんだらうけど。

ここまで迷つてくれれば、製作者も本望だろ？

千石は終始上機嫌だし、迷路を楽しんでこるようだから別に構わないのだが……。

でもやはり相当寒いのか、千石がコアラのように抱きついて暖を取る姿を見ていると（何故か蛇が巻き付いているようにも見える不思議！）、早く脱出した方がいいのではと思えてきた。

あ。また間違ったルートに入った。この先は袋小路があるだけだ

……。

果たして僕はゴールすることができるのだろうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3854ba/>

使物語

2012年1月10日23時28分発行